Interview

CINEMA Chupki TABATA
ユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」

平塚 千穂子
CINEMA Chupki TABATA代表

東京・田端の商店街の中に日本初のユニバーサルシアター、CINEMA Chupki TABATA（シネマ・チュプキ・タバタ）がオープンして8年目。開館当時から上映作品すべてに視覚障碍者が映画を楽しめる音声ガイドを製作・用意し、音響設備にも力を入れて、優れた音環境を実現している。代表者の平塚千穂子さんに、これまでの経緯と今後の展開について聞いた。

聞き手：渡部 隆　取材・文：清水 潤

―― さまざまなサウンドスケープを考えるとき、映画館の中でシネマ・チュプキ・タバタは独自の活動を続けておいでですね。私も視覚障碍を持っており、強い関心がありました。このユニバーサルシアターをなぜ始めたのか、原点からお話をお願いします。

私は2001年にCity Lightsというボランティア団体を立ち上げ、視覚に障碍のある方々の映画鑑賞の環境づくりに取り組んできました。当時はまだ「音声ガイド」は日本にはあまり存在していなくて、どうやって映像をことばで伝えたらいいんだろう、という地点から当事者の方々と一緒にスタートして、最初に「音声ガイド研究会」を立ち上げました。その年に『千と千尋の神隠し』が公開されたとき、映画館で観たいと言われる方がいらして、「見える方が同行し、隣に座って耳元で解説してほしい」と言われたことをきっかけに、映画鑑賞会を開き、一緒に映画館へ出かけたり、公共施設で上映会を開くという活動を15年間続けました。その積み重ねがあって、そろそろ自分たちの映画館を持って、「音声ガイド」を制作し、上映作品全部に付けたいと思うようになりました。

同時に、目が見えない方だけでなく、聴覚障碍を持つ方は日本映画の場合、字幕がなくて鑑賞できないという問題があるし、大きな劇場では車椅子利用者の方のスペースが観やすい場所にないとか、映画鑑賞の環境にいろいろな問題が見えてきたので、それなら全部を解消するユニバーサルデザインの映画館をつくろうと考えました。募金を集め、多くの方の協力で2016年9月に設立したのがシネマ・チュプキ・タバタです。

―― City Lightsはチャップリンの『街の灯』の原題から？　映画館をつくり、同時に音声ガイドの制作を始められたんですね。

はい、無声映画の『街の灯』を視覚障碍者の方々に伝えられないかというとても難しいプロジェクトがあり、そこに私が参加し、見えない方たちに初めて出会って試行錯誤し、ボランティア団体を立ち上げたので、発端となったCity Lightsを名前にしました。

音声ガイドをつくり始めたころは、先天盲の方は細かいことは気にされないので、服装や髪形についての説明はいらないと言われて、最初はシンプルな音声ガイドをつくっていました。しかし、中途失明の方々が集まる上映会では音声ガイドが足りないと叱られたりして、いろいろな失敗を繰り返しながら、手探りで進んできました。いまだにそんな感じですけれど、続けられるのは当事者の皆さんの声を聴きながら一緒に活動してきたことが大きいと思います。

音声ガイドばかりでなく、映画鑑賞までのプロセスに必要なことも実現したいと考えました。たとえば上映スケジュールの組み方でも、大きな劇場では観客の集客動員数に合わせて時間を変更したり、打ち切ったりしますね。すると映画館まで同行するヘルパーさんを頼む人は予約の見通しが立たない。チュプキは20席のミニシアターで、安定したスケジュールを組んでいます。あるいは一人で駅まで来る方は映画館との間の誘導サービスがほしいとか、アイデアは皆さんがくださるので、他所を真似するのではなく、どんな方も安心して楽しめる独自の映画館を目指してきました。

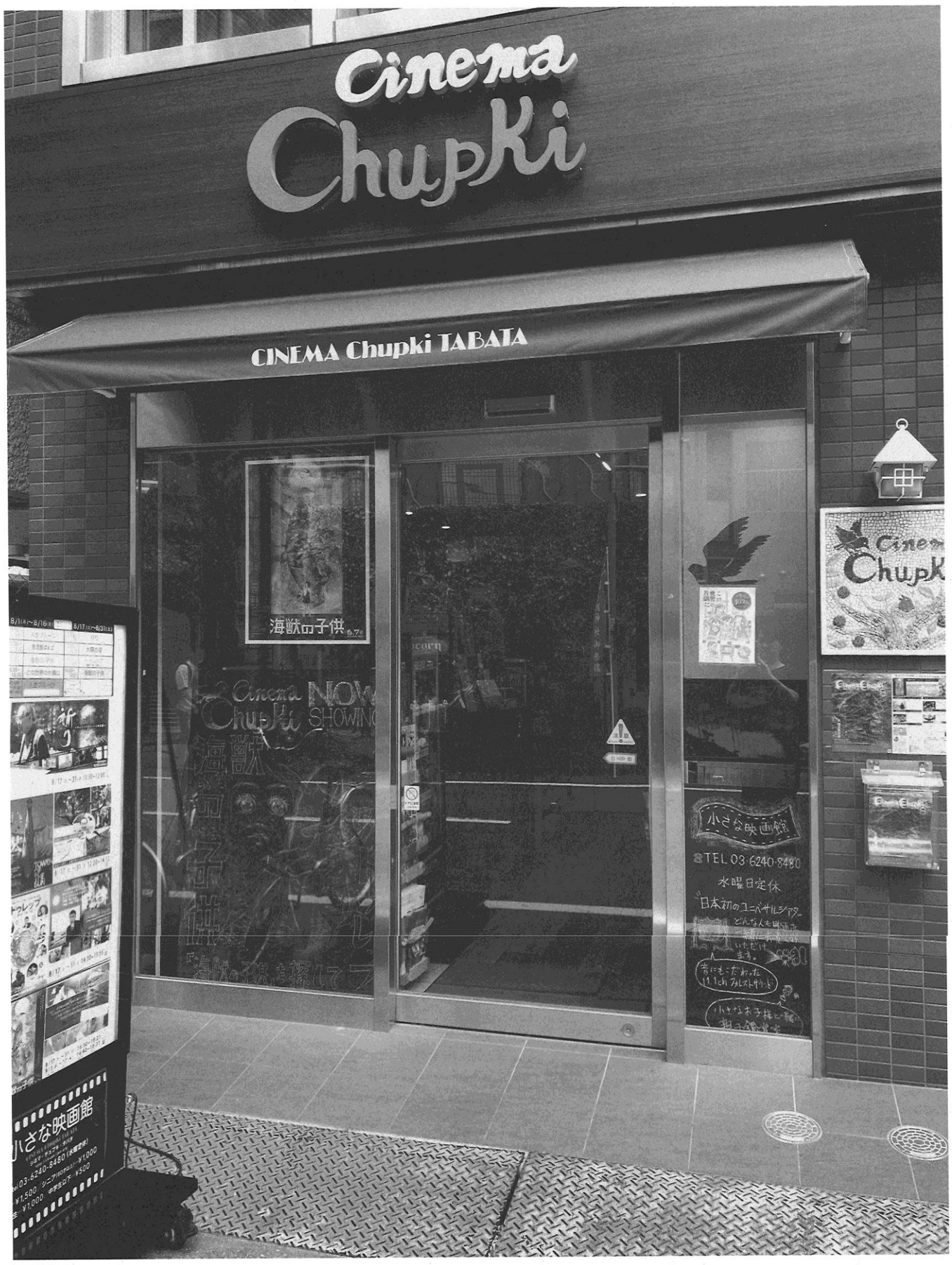
障碍を持つ方たちがいつでも楽しめる場所にすることで、月に1回は行こうと決めて来てくださったり、目が見えなくなってから外に出なくなった方が、ラジオでチュプキのことを聴いて興味を持ち、奥さまと一緒に来館されて映画を楽しまれるようになったりと、外出するきっかけに役立てていただいていることもうれしく思っています。

―― さらに音を聴くこと、その環境がとても大事なところですね。

見えない方たちにとって、音は生命ですね。映画本編の音をとてもよく聴いていらっしゃいます。だからチュプキは絶対に音のいい映画館にしたいと設立前から発信していました。すると、音響監督の岩浪美和さんが協力してくださったんです。岩浪さんは『ジョジョと奇妙な冒険』や『ソードアート・オンライン』などたくさんの人気アニメ映画の音響を長年にわたって手掛けている方です。その仕事を通して、一般の観客が音に対してとても無頓着であることを感じてこられたそうです。映画館も外国産の派手なスピーカーを最初に設置して、メンテナンスもしないまま大音響で鳴らしているだけというケースが少なくない、「そうじゃないんだ」と。観客にも、映画館にも音への意識を高めてもらおうと「極音上映」という文化を生み出されました。さまざまな映画館へ出向いて、自分で音響調整をして観客が音を体感するような上映が行われるようになったんです。

シネマ・チュプキ・タバタ館内

ATER



「駅下仲町通り商店街」にあるシネマ・チュプキ・タバタ。隣りは、業務スーパー。

平塚千穂子　Chihoko Hiratsuka
1972年東京都生まれ。97年早稲田大学教育学部卒業。飲食店勤務を経て、名画座「早稲田松竹」のスタッフに。01年4月、視覚障がい者の映画鑑賞をサポートするバリアフリー映画鑑賞推進団体「City Lights」を設立。14年に上映スペース「Art Space Chupki」を開き、月4回の上映会を開催。16年9月に「CINEMA Chupki TABATA」をオープン。21年『こころの通訳者たち』を製作し、山路ふみ子映画賞福祉賞、文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞（芸術振興部門を受賞。

岩浪さんは見えない方たちのことを「こんなに音を大切に聴いてくれるお客さんはいないよ」と感激されて、「作品の音はいつもつくっているけれど、映画館の音響づくりを一から手掛けるのは初めてだから、とても楽しみ」と話してくださいました。私が本編の風の音、雨の音といった繊細な自然の音がきれいに聴こえるスピーカーがいいとお話すると、岩浪さんはDALIというデンマークのメーカーのスピーカーを選び、サラウンドを組んでくださいました。20席しかない映画館に、なんと12個のスピーカーで7.1サラウンド+天井から4個のスピーカーが下がり、まさに360度、音に包まれるサウンドフィールドがつくられています。

―― すばらしいですね。音というのは、空間の中を動いていますから、時間と空間をどのように広げていくか。波動、反射、共振とか、いろいろな現象をどう構成していくかによってまったく変わりますからね。

音を大切にする視覚障碍者の方たちのために考えた音のデザインが、一般の観客にとっても、いい音で映画を観られる恩恵をもたらしています。本当のユニバーサルデザインだとあらためて気付かせてもらいました。音響マニアの方もよくおいでになりますよ。

―― オリジナルの音声ガイドをつくるのは、たいへんなことでしょうね。

たいへんですが、チュプキではボランタリーに支えてくださる人たちのおかげで何とかなっています。映画業界にも近年、少しずつ変化があり、メジャーな作品については大手の映画製作・配給会社が音声ガイドや字幕を制作してくださるようになりました。スマートフォンにダウンロードして使えるHELLO! MOVIE、UDCastというアプリに対応させて、シネコンを中心に多くの映画館で利用されています。改正された障害者差別解消法が今年4月に施行されて、公開する映画は必ず音声ガイドと字幕をつける流れになってはいますが、小規模な映画会社が制作したマイナーな作品になると、音声ガイドなどを用意することが難しい現実があります。そういった作品は、当館でつくらせてくださいとお願いするかたちで、制作許可と早めに完成台本や映像を提供いただいて連携しています。
音声ガイドをつくっている人たちはCity Lightsのメンバーもいますし、あとはチュプキでコロナ前に開いた音声ガイド講習会の受講生の方たちがグループをつくって協力してくれています。プロのナレーターに依頼するとか、スタジオを使う予算はなくて、映画館のスタッフが「滑舌があまくてごめんなさい」という思いでナレーションを読んだりするので、手作り感のある音声ガイドになっています。すべてを自分たちでやるので、間違いを発見したときはすぐに修正が効くといういいところもありますね。
音声ガイドは見えない人のためだけ、字幕は聞こえない人のためだけのものではなく、チュプキではさまざまな聞こえにくさ、見えにくさを持つ方に合わせて、イヤホンの音声を調整して対応することができますし、一般の方にとっても新たな気付きを生むなど、映画の観方を広げていけると思います。

―― 現在の課題や、これからについては?

映画館の規模が大きくなると、一人ひとりの声を聞くのも難しくなっていきます。全国のいろいろな地域に、チュプキのような小さな映画館が広がっていけば、諦めていた方たちに細やかなサービスを提供して、楽しんでもらうことができると思っています。それがこれからの希望ですが、いま、ユニバーサル以前に、ミニシアターは存続の危機にあって、閉館していく映画館も多く、大きな課題になっています。背景にはコロナで動画配信サービスが定着したことがあります。また、若い人たちはレジャーのひとつとしてシネコンでエンタメ映画を楽しむ以外に、社会派の作品や、多様な表現、考え方に触れられるミニシアターの存在を知らないことも多いですね。

―― 映画館や本屋というのは、まちをかたちづくっている場所ですよね。以前は500メートル圏内に生活に必要なモノや場所が揃っていました。いま、いろいろな商店がなくなって、そうなると人の暮らすまちではありません。日本の社会が壊れかかっています。それでも本当に人と人が関わるまちづくりを目指して、再生しているところもあります。個性的な映画館、個性的な棚揃えの本屋などがそのきっかけになっているんです。どうやってまちを再生していくか、みんなで協力していくしかないでしょうね。

いま、私たちは映画館がまちづくりや、地域コミュニティをつくる空間として、存在価値を持っていることをアピールしているところです。この田端のまちは下町風情も残る地域で、商店街のビルの1階を借りて映画館にしたいと言ったとき、ビルオーナーさんはびっくりしながら、「田端に映画館ができたら世田谷区みたいな雰囲気になるかな」とわくわくされていました。近所の不動産屋さんは物件探しのお客さんに、魅力的なまち情報として、映画館があると話しているようなんです。新しい飲食店もオープンして少しずつ変わってきました。
今後とも自分たちでやってきたことを伝え、たくさんの地域にユニバーサルシアターを広げていきたいと思っています。とくに地方都市では人の暮らすまちが失われる状況が進んでいますが、うれしいことにいま、埼玉県大宮駅の近くに、新しくユニバーサルなミニシアターが生まれようとしています。本当に一般の個人の方が持たれた夢に、ご家族が協力するというかたちです。私たちはこの画期的な映画館づくりを追って映画を撮ろうと、現在カメラを回しているところです。